

---

# エンドレス・ゲート・オンライン

ころみごや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハンドレス・ゲート・オンライン

### 【Zコード】

Z7539X

### 【作者名】

じゅみじや

### 【あらすじ】

ハンドレス・ゲート・オンライン 通称EGOは、稼働を始めてから一年が経過していた。その間、世界中で百万人以上の人々がEGOにログインし、MMORPGならではの仮想世界を楽しんでいた。ルイピスター＝タスピールもまた、彼らと同じく、EGOへのログインを試みた。だが、EGOにはもう一つ、別の顔が存在した。目を覚ましてみれば、ルイは真っ暗な空間へと転移し、辺りには大勢のモンスターが潜んでいた。そして、ルイの許へ届けられた一通のメッセージ。そこに書かれてあったのは……。

囚人が一人、失命した。

食欲旺盛な悪魔に囮まれたのが運の尽きだ。

命の証あかしを失い、肉塊と成り果てた囚人の許に群がり始めたかと思えば、四散を赦すことなく手足を引き千切り、頭の上から指の先まで、跡形も残さずに食い散らかしていく。

意識を失うことが出来れば、或いは多少の救いがあつたのかかもしれない。けれどもその囚人は、自身に群がる悪魔どもの牙や爪によつて、拷問にも勝るとも劣らない恐怖と絶望を脳に植え付けられ、翻り殺されたのだ。痛かつただろう、苦しかつただろう、辛かつただろう。

そしてまた、その囚人は、今から七日後に二度目の死を迎へなければならない。たつた今、死のカウントダウンが幕を開けたのだ。記憶の引き出しに鍵を掛けっていないとすれば、わたしはその囚人の名前を知らないし、言葉を交わしたこともないはずだ。つまりは、大切な人を失つたわけではないのだ。

それなのに、何故、わたしは泣いているのだろうか。

「……っ」

次なる標的を決めた悪魔どもは、ゆつくりと黒羽を羽ばたかせながら距離を測り、わたしに向けて下卑た笑いを浴びせる。鋭く尖った爪には彼の血がこびり付き、肉片が挟まっているに違いない。想像するだけでも吐き気を催しそうになるが、喉を通る前に強引に押し戻し、逆流を拒絶する。これも全ては意識的なものでしかないけれども、無理やりにでも鼓舞しなければ戦えないし、立ち向かうことも出来ない。

でも、だからこそ、わたしは自分に言い聞かせる。

「わたしは死はない、……絶対に、死ねない……っ」

目の前に立ちはだかる現実から目を背けてはならない。そんなこ

とをすれば、此処ではあつといつ間に死することになる。全神経を研ぎ澄ませ、敵の動きに集中しなければ、次に殺されるのはわたしだ。こんなところで死んでたまるものか。

「絶対に……生き残ってみせる……」

黒衣を身に纏つたわたしは、左手を横に伸ばして肩の高さへと上げる。

直後、鈍い輝きを放つ黒い鎌が何も無い空間に形成し、左腕に巻きついていく。

黒い鎌を視界に映し、悪魔どもは臨戦態勢を整えるが、その姿を視認することなく、わたしは誰にも聞こえないようにそっと呟いた。

「だから、わたしを恨まないで」

一秒後、悪魔ども目掛けて、わたしは死神の如く空を駆けていた

⋮

## 【1・1】

黒から白に、瞼の裏が変化する。

静寂と暗闇に整われた空間に、不躾にも調和を試みたものの、釣り合いを保つには些か眩すぎたらしい。我慢の限界を早々に見極め、瞑つていた瞼をおずおずと開いてみると、だだつ広い空間が視界に映し出され、生まれたてのアバターを出迎えてくれた。

見たことのない造形が視覚に訴えかけ、3Dオブジェクトが見事なまでに空間的形象を表現している。仮想世界とは思えないほどの精巧な作りが施された空間は、各プレイヤーに現実世界との境目を曖昧にし得るであろう迫真性の再現に成功していた。

息を吸い、緩やかに吐いてみる。

何気ない動作一つを取つてみても、此処が如何に優れた技術によつて生み出されたのかを認識し、同時に驚嘆することができた。

生まれながらに人が持つ五つの感覚のうち、視覚、聴覚、嗅覚、味覚に携わる神経細胞のエクスポート技術を可能とするデータベースプログラムが開発されたことによつて、今現在、オレが存在する仮想世界 エンドレス・ゲート・オンライン 通称? EGO? は、知覚を除く全ての感覚を感じ取ることが可能なMMORPGとして、コンピューターネットワーク上に稼働し、電子回路の海を彷徨い続けている。他にはないシステムの構築、それの導入によつて、EGOが現実世界において多大なる支持を得たのは、もはや自然の摂理とも言えるだろう。

だが、不可解な点が一つ。

「……此處、何処なんだ……？」

黒を基調とした空間は、おどろおどろしい装飾が室内を染め上げるかのように飾り付けることによつて、過剰な不気味さを演出していた。

オレは今、生まれて初めて初めてEGOにログインしたわけだが、この

場所が勇者軍の城下町ではないことぐらいは理解できる。

EGOに初めてログインしたアバターは、勇者軍が陣地とする城下町へと強制的に転移し、チコートリアルを担当するNPCによつて初步の動作から行動に至るまで、一つ一つ丁寧にレクチャーされるはずなのだが、おかしなことにNPCの姿が見当たらない。そればかりか、室内には他のプレイヤーが一人もいなかつた。何処と無く怪しげな雰囲気が漂つているようにも思えるが、これではまるで魔王軍の城内に迷い込んでしまつたみたいだ。

「誰も……いないのか？」

どうやらオレのアバターは椅子に腰掛けていたらしい。肘掛け付きの豪華な椅子は床に固定されていて、背には弾力性のある柔らかな素材が使われていた。

「初期装備にしては随分と質がいいみたいだが……」

徐に椅子から立ち上ると、両肩から腰の辺りまで、そして足の先まで、至らぬ隈なく全身を見回してみる。黒に染まつた外套のようなものを身に纏い、加えて服装から履いている靴に至るまで、全てが黒に統一されていた。

「暗闇に同化しそうな装備だな……」

眉を顰め、嘆息を漏らす。

想像していたものとは異なる状況に、思考が追いつかなくなつているようだ。

「ん……、扉か？ あれが初めの門なのか？」

視線を前に戻すと、鈍い輝きを放つ扉を見つけた。多少の距離はあつたが、オレが腰掛けていた椅子と向かい合つ場所に出入り口が用意されていたらしい。一先ず、この部屋から抜け出して、チコトリアル担当のNPCを捜し出さなければならないだろう。それでも見つからない場合は、一旦ログアウトして説明書を読み直すことになりそうだ。

少々強引にだが自分自身を納得させると、オレは扉の前へと移動してみる。

地を踏み、体を動かし、歩を進める。知覚は存在しないはずなのだが、現実と変わらぬ皮膚感覚を認識し、衣類と靴による確かな肌触りを手ごたえとして感じ取った。これは現実か？

黒に塗られた鉄扉の握り手を左右の手で一つずつ掴み、腕に力を込めて押してみる。オレの手に反応し、鼓動するかのように鉄扉が黒から赤に、そしてまた黒に染まり返っていく。

「おわ……、つと」

錆びの付いた効果音を室内に響かせながら、少しづつ鉄扉が動き始めたかと思えば、やがてオレの力を借りることなく独りでに開いていく。これもEGOのシステムによるシナリオの一部と考えてもいいのだろうか。それにしても初期の段階から凝った演出をするものだ。

だが、オレの思考はすぐに遮られることになる。

あろうことか、鉄扉の向こう側には大量のモンスターが待ち構えていた。

「あ……おいおい、なんだよこれ……一体全体どうなつてんだ……」

目を疑いたくなる光景に、オレは思わず半歩後ずさる。まさかいきなりモンスターとの戦闘をこなさなければならないわけでもあるまい。下手すればチュートリアルに出会う前に死亡することになるぞ。たとえEGO初心者だとしても、そんなみつともない死に方は御免だ。

「扉が……開いただと？」

すると、モンスターの群れの中心から細く尖った声が聞こえてきた。声の主は驚きに満ちているのか、ありえないものを見てしまったかのような表情を作り、オレの姿を視認する。

人型の姿を成したモンスターは、恐らくは人狼の種族に属しているのだろう。狼のような顔で人語を扱い、人間と同じように衣類を身に着けていた。しかもそれだけでなく、拳句には武具まで装備していくやがる。EGOではモンスターにも武具を装備することができるのか。

「 ッ

予想外の展開に焦りを感じ始めたが、突然、上部に黒い影が差した。

「 よおー、お前さん見ない顔だな？ デウヤツてそこに入ったんだよ？」

陽気な喋り方で頭上から話しかけてきたのは、赤銅に輝く両翼を左右に広げ、宙を旋回するモンスターだった。その姿形から察するに、このモンスターは魔族に属しているに違いない。

両翼の先端には鋭く尖った棘のようなものがあり、触れただけでダメージを受けてしまいそうだ。両翼を含めれば、全長三メートルは優に超えているだろう。空を移動可能な魔族を前にして、もはや逃げる場所は何処にもない。絶望が支配しつつある状況に、オレは情けなくも尻餅をついてしまった。

「 ……あ、魔族も……言葉を話すのか……つー？」

「 うはは、話しちゃ悪いってのか？ お前さんだつて話しててるじゃねえかよ、なあ？」

頭上で風を切り、ぐるぐると弧を描き続ける魔族は、人狼と同じように人語を話したかと思えば、人間と差ほど変わらぬ容姿を持ち合わせてもいた。人型に近しい姿を持つモンスターは、人語を話せるシステムにでもなっているのか。

「 ヨシリカ、邪魔」

人狼と魔族が人語を話すことに驚きを隠せないと、更に別のモンスターの声が耳に届く。少し低めだが、けれども女性特有の美しさを含んだ声の持ち主は、既に鉄扉のそばに佇んでいた。

「 へいへい、すまねえこつた。アンノルには逆らえねえからなー」

「 そこを退いて」

優しさと柔らかさを欠いた、淡々とした口調で話すのは、黒衣を身に纏つた女性だ。

声だけでは断言し辛かったものの、フードの奥に見え隠れする人物は、明らかに女性と認識可能な容姿をしていた。しかし、彼女に

もまた人狼と悪魔のように驚くべき特徴があった。

「……う、浮いてる？」

両翼を介し空を舞う悪魔とは異なり、彼女は身動き一つせずに二セセンチほどの高さに浮いていた。ふわりふわりと漂うわけでもなく、まるでそれが当たり前のことのような印象を受ける。身に纏う黒衣はやけに大きめで、体格には合っていないらしく、異様なほどに裾が長い。

ほんの少しだけ顔を覗かせる爪先つまわきの存在によつて、上半身のみのモンスターではないことは理解できる。ただ、それではまだ不十分だ。此処にいるということはつまり、彼女もまた彼らと同じようにモンスターの仲間なのだろう。オレはまだ、彼女がどんな種族のモンスターなのかを見破ることができないでいる。

「浮いているのが、そんなにおかしい？」

風を切らずに音もなく距離を縮める彼女は、深めに被つていたフードを取つてみせると、表情を変えることなく小首を傾げてみせる。そこで改めて、オレは彼女の素顔を捉えた。

「わたしの名前は、ロア＝アンノル。見ての通り、死神族のアバターを選択したわ」

「死神族のアバターだつて？」

死神の姿を成した彼女　　ロア＝アンノルは、ほんのりと蒼が差した黒髪をしている。後ろ髪を短めに切り揃え、前下がりに髪の長さが整えられているのが印象的だ。

両耳は髪に隠されていて、それなりに伸びた前髪が赤に染まる瞳をほんの少しだけ隠してしまうのが残念だが、彼女の特徴的な髪型の性質上、うなじはしっかりと見えているはずだ。背後に回り込む機会があれば、是非一度この目で確かめてみたくなる。……いや、待て。モンスターを相手にオレは何を言つているんだ。

「死神族のアバターなんて初期設定時の選択項目には入つてなかつたぞ」

もしかすると隠れアバターの可能性も無きにしも非ずだが、ログ

インして早々にお目に掛かれるほど甘くはない。それ以前に、不可解なことが多すぎて頭が混乱しそうだ。

「それに……なんでお前には名前があるんだ？　MOBモンスターが特定の名前を持つなんておかしいだろ？」

通常、NPCの中でも敵を表すMOBモンスターには、各自の形体によつて呼び名が存在する。チユートリアルを担当するNPCに、クエストの進行に携わるNPC、更にはEGOに於けるボスモンスターなど、NPCの形態は様々だが、総称とは別に特定の名前を持つMOBモンスターは限りなく少ない。個体ごとに意識を持つて言葉を交わし、拳句には自らの意思に従い行動を取るなど、もはやそれはNPCやMOBの領域を超えてるので、一人のプレイヤーとして認めても遜色ないと見えよう。

だからこそ、解決することのできない問題が浮かび上がつてくる。彼女は、一体何者なのか。そして先ほどの人狼と悪魔も同じく。

「わたしがMOBモンスター？……それはジョークではなく、眞面目に言つてるの？」

少し呆れ顔になつた彼女は、小さく息を吐く。その後ろでは、天井付近をぐるぐると旋回する悪魔を筆頭に、モンスターの笑い声が其処彼処から溢れ出し、耳を劈いた。

「なつ、なんだよ、何がおかしいんだつ」

尻餅をついたまま、オレは声を荒げた。意味も分からずに笑われてしまい、恥ずかしさから頭に血が上つていく。できることなら、今すぐにでもこの場から逃げ出したかった。それもこれも全ては現状が物語つていると言えるだろう。

たとえ今此処でログアウトを試みたとしても、新たにログインする際にアバターが出現する場所は変わらない。言うなれば、オレには逃げ場など存在しないのだ。

一つの命を守り切り、生き残ることを半ば諦めているからこそ、モンスターを相手に反論するような間抜けな行為を実行に移せるのだろう。だがしかし、目の前に立ちはだかる大量のモンスターにま

ともな抵抗一つできずに死んでしまうのであれば、次に活かせるよう少しでも情報を得ておきたいところだ。

そんなオレを見かねたのか、ロアは宙に浮きながら限界まで近づくと、そつと、手を差し伸べてきた。立ち上がるよう促しているのだろう。

それがまた羞恥に拍車を掛け、思考が暴走を始める。モンスターの手助けなど借りるものか。

ロアの手を振り払い、オレは一人で立ち上がってみせた。

「……その様子では、三日間生き残れば大したものね」

折角の好意を無下にされたというのに、ロアは機嫌を損ねることもなく、冷静にオレの様子を分析に掛かる。

「生き残るつて……此処でか？」

反問し、ロアが頷く姿を確認する。口を開く前に一旦後ろを振り返り、全体に視線を流していく。途端に、声を上げて笑っていたモンスターたちが静まり返った。

ひょっとすると、ロアはボスモンスター級のNPCなのだろうか。だとすれば、安易に歯向かうような態度を取れば、あつという間に殺されかねない。しかしながらロアをNPCとするには自らの意思を持ちすぎているし、そもそもNPCがプレイヤーの態度によって意見を変えるなどあり得るのか。まるで矛盾が頭の中を蝕んでいくかのようだ。

役に立たない思考を中断し、こちらを向き直すロアの赤い瞳に視線を向ける。

「ステータスが低い者は、此処では生き残ることが困難と言えるわ。たつた一度でも死んでしまえば、あなたもわたしもその時点でゲームオーバーとなるんだから、時には形振り構わず助けを乞いなさい。囚人と言えども、わたしたちは皆仲間なんだから」

「……囚人？ オレが？」

残念なことに、オレにはロアが何を言っているのか理解することができない。EGOに初めてログインする初心者プレイヤーとはい

え、あまりにも情報が不足している。

いや、それはともかくとして、彼女は聞き捨てならない言葉を口にしていた。

「一度でも死ねばゲームオーバーって、どういづことだ？」  
EGOでは、インターネット上にて発売されたデータプログラムを購入した者にIDCと呼ばれるものを発送している。IDCは子供の掌に収まる大きさだが、その中には膨大な量のデータが含まれていて、それを基にEGOの公式サイトでアカウントを取得することができる。

ログイン前に目を通した説明書によると、EGOでは一つのアカウントに付き、三つのアバターを作成することが可能となっているのだが、EGOには他のMMORPGとは異なる点が存在する。それは、一つのアカウントに付き、作成したアバターの数に関係なく二回しか死ぬことができないことだ。

作成したアバターが一つなら、二度の死をやり直すことができるが、三度目の死を体験したアバターはEGOにおいてゲームオーバーとなり、強制的にアカウントを消失してしまう。

また、メインアバターの他にサブのアバターを一つ作成しているプレイヤーの場合、メインとサブのアバターによって、既に一つの命を扱っていることになるので、どちらかのアバターが二度目の死を体験し、残る一つのアバターが死してしまえば、アバターを一つしか作成していないプレイヤーと同じようにアカウントが消滅することになる。

このシステムの存在によって、EGOのプレイヤーの九割以上が一つのアバターしか作成しておらず、サブのアバターを作成するプレイヤーは変人扱いされるほどだ。プレイヤー同士で殺し合うPKシステムも採用されているEGOにおいて、高額を支払い購入したIDCが三度の死により塵と化すシステムには贊否両論の声が上がっているが、逆にこのシステムが存在するからこそ、EGOのプレイヤーは命を大事にし、常に危険と隣り合わせのスリルある仮想世界にいる。

界を満喫しているのも事実だった。全世界で絶大なる支持を得て、総アカウント数が一千万を超えたのも納得せざるを得ないだろう。

「……あなた、本当に何も知らないの？」

目を疑うものを見てしまったかのように、ロアは眉間に皺を寄せていいく。

EGOのプレイヤーであれば誰もが知っているであろう二つの命のシステムを、ロアは知らなかつた。否、知らない振りをしてオレを騙そうとしているんだ。

たつた一度でも死ねばゲームオーバーとなり、アカウントを消滅させられると嘘を吐いて、EGO初心者のオレを脅かして、そして……それから、どうするんだ？

そんな嘘を吐いて、彼女たちに一体何の得があるんだ。

ロアの瞳は、真っ直ぐにオレの姿を捉えている。嘘を吐いているようには到底思えない。

まさか、本当に……。

「まあ、別にいいわ……。それよりもまず、あなたに聞いておきたいことがあるの」

「聞きたいこと？」

ログイン早々、何らかのクエストが発生したのか、ロアは自分の瞳に映るものをオレの後ろへと移した。

「その扉、どうやって開けたの？」

顎の先で指すのは、黒色の鉄扉だ。その言葉を合図に興味の対象が移つたのか、ロア以外のモンスターたちも皆一様に鉄扉に向けて視線をぶつけている。

「鍵なら掛かつてなかつたぞ」

「嘘言わないで。あなたが出てきたその部屋は開かずの間と呼ばれているのよ？　この一年間で誰もその扉が開いたところを見たことがないわ」

その言い方から察するに、部屋の外側からは入ることができなかつたらしい。とはいえ、鍵が掛かつてなかつたのは事実だ。確かに

見た目は重そうな扉ではあるが、押してみれば呆氣なく開いてしまつた。

「今見ただろ、扉が開くところを」

「つ、それはまあ……確かにそうだけど……」

ロアは納得のいかない様子ではあるが、目の前で起こった現実をありのままに伝えたまでだ。

「そもそもだな、EGOに初めてログインするプレイヤーに対して、EGO内で起こった現象について質問されても、オレはまだ説明書に目を通しただけなんだから何も分からぬぞ」

オレが質問をするのが当たり前であって、それるのは明らかにおかしい。EGOでの案内役を務めるNPCは一体何処にいるんだ。もしかしてロアがチュートリアルとでも言いつつもりか。

「あ、あなた……今初めて、EGOにログインしたの？」

今まで冷靜さを保っていたロアが、大げさとも言える反応を示す。しかもそれはロアだけではなく、オレとロアの話を聞いていた沢山のモンスターが揃いも揃つて同じ反応を取つた。

一体全体、彼らは何に驚いているのか。EGO初心者のオレには、それすらも理解できない。

「……お、おう。そうだけど……そんなに驚くことか？」

テストが終了し、EGOが稼働を始めてから一年が経過した今現在、オレは自宅でEGOのID<sup>チップ</sup>を発見し、アカウントを作成した。

EGOでは、初期設定の段階において様々な選択肢を迫られ、回答を義務付けられている。

性別、体格、容姿、これらはエクスポート時に自動的に認識され、属性と種族の項目に関してはプレイヤー好みによって選択し、それぞれの属性と種族により、特定の特技と魔法を習得可能なシステムだ。

IDCをコンピュータ上にエクスポートして初期設定を終えると、IDCは自動的にデータを消去する。これは登録したプレイヤー以

外には扱うことができないようにするためだ。

その後、「コンピュータ上でEGOを起動し、IDとパスワードを入力すると、強烈な電波信号が脳に送り込まれ、半睡眠状態へと陥る。その状態において、プレイヤーの意識だけがEGOに転送され、現実とは異なる仮想世界を満喫することができるわけだ。快適な環境でプレイするために、現実世界のオレは部屋のベッドで横になっている。はたから見れば睡眠を取つてはいるようにしか見えないので、勉強の息抜きには丁度いいだろう。

また、EGOからログアウトする際には、EGO上でウィンドウを開いてコマンドの入力を実行に移せばいい。それ以外にも、EGOにログインしている状態で現実世界の体に触れられると、人体への危険を察知し、強制的にログアウトするらしい。まだ一度もログアウトしたことになければ、ウィンドウを開いたこともないので、試すべき行動は沢山ありそうだ。

「それじゃあ、此処が何処なのか……知らないの？」

「勇者軍の城下町だと嬉しいんだけどな」

あからさまに溜息を吐き、何がどうなつてているのか分からないと言いたげな態度を取つた。

もはや、此処が勇者軍の陣地ではないことぐらい理解している。ログインすると同時に黒い部屋に出現したかと思えば、数え切れないほどのモンスターに遭遇し、逃げ場を失つたんだからな。あまり考えたくはないが、察するに此処は魔王軍の陣地内かもしれない。どうやらオレはとんでもない場所に飛ばされてしまつたらしい。こんな状況では幾ら命があるとも足りるわけがない。ログインする度に酛り殺されるのが目に見えている。

そんなオレの考えを見透かしたのか、ロアは至つて真面目な表情で話を続ける。

「此処はね、魔王軍の陣地にある魔王城の城内なの。……そして、あなたがいた部屋は」「王の間。

ロアは、そう口にした。

魔王城の城内である「*つゝ*」とは薄々気づいてはいたが、しかしさまざかオレが飛ばされてきたところが王の間だとは予想だにしなかった。

「此処が、王の間……」

後ろを振り向き、室内の様子を改めて見渡してみる。そう言われてみれば確かに、魔王が坐するに相応しいとも思える黒々とした雰囲気が作り上げられていた。

しかしそうなると、オレが座つていた椅子は話の流れから察するに玉座になるわけだ。室内が暗すぎて、鉄扉を開けてまともな光が差し込まれるまで気付かなかつたんだろう。先ほどは目に付かなかつたが、3Dオブジェクトによつて映し出された装飾品の数々が、無造作に床に転がつてもいた。

「魔王軍と勇者軍にはそれぞれ？ 王の間？ があつて、魔王軍には魔王が、そして勇者軍には王様が、王の間の主あるじとして存在するわ。……だけど、魔王軍の王の間には魔王が存在しないの」

「魔王が……存在しないだと？ それじゃあどうして王の間が存在するんだよ」

ただ、なんとなく設置したわけではあるまい。それなりの理由があるはずだ

## 【1・2】

「アンノル、説明を代わろう」「う」とここで、選手が交代する。

ロアに変わつて、人狼の姿を成したモンスターがオレの前に立つ。宙に浮く死神のロアは、それほど身長は高くなく、天井に張り付く悪魔も両翼を除けばオレと変わらないほどだが、今現在、オレの目の前に佇む人狼は、三メートルを超えているだろう。

「まず、自己紹介をしてもいいかな？ 私の名前はローランド＝ベイクルーアだ。宜しく」

「お、おう……」

恐ろしげな外見からは想像し辛かつたが、人狼 ローランド＝ベイクルーアは、目元を緩ませ、握手を求めてきた。友好的な素振りに戸惑いつつ、オレはローランドの手を握り、握手を交わした。

「ルイピスター＝タスピール。それがオレの名だ」

EGOにログインして、オレは初めて自分の名前を口にした。

但し、相手は人間じゃない。モンスターだ。

「ふむ、タスピールか。……なるほどね」

オレの名前を耳にして、ローランドは口の端を右に左に動かしながら反応する。

「これはあくまで私の推測でしかないのだが……タスピール、キミはEGOにログインする際、初期設定においてアバターを選択することができなかつたのではないか？」

「……なんで、それを？」

図星だった。

オレは自宅で見つけたIDCを利用して、EGOのアカウントを取得するために公式サイトを調べた。IDCに記載されたIDとパスワードを入力した後、すぐにオレはベッドに横になり、半睡眠状態へと誘われることになった。EGOから発せられる電波信号を脳

細胞が受信する範囲は十メートル強と説明書や公式サイトに書いてあつたので、自分の部屋に籠つていればログインするには問題なかつた。

だがここで一つ問題が発生する。それは初期設定を終わらせることがなくEGOに飛ばされたことについてだ。

説明書や公式サイトの案内によると、EGOを初めてプレイする場合、自身の分身となるアバターの作成を義務付けられているが、それはEGOにログインすると同時に選択画面が出てくる手はずとなつていて。しかしだ、オレがログインした際には、選択画面など一切出てこなかつた。その数秒後、目が覚めれば今度は魔王軍の陣地に飛ばされていた。自宅にあつたIDCは埃を被つていたから、もしかすると壊れていたのかもしれない。

「まず、キミが知つてゐるであろう真実は、此処では當て嵌まる」とはないだろ?」「う

話の内容に眉を顰ひそめ、オレは耳を傾ける。

「キミは、私を含めた此処に存在する全てのモンスターがNPCかMOBであると勘違いしてゐるようだが、それは間違いだ。私を含め、全員が一人のプレイヤーとして生きている」

「えつ、あんたら全員が?」

周囲を見渡してみれば、ローランドの言葉にしつかりと頷くモンスターたちの姿を確認できる。ロアは勿論、空を舞う悪魔も同じように首を縦に振つた。

「……で、でも、魔王軍にプレイヤーがいるなんて聞いてないぞ」  
公式サイトには、プレイヤーが扱うことが可能なアバターは勇者軍に限られると記載されていたはずだ。それなのに何故、彼らはモンスターのアバターを作成し、EGOに存在することができるのか。  
「それはなー、EGOのクソッタレゲーム・スターGMの野郎どもが、俺ら囚人をテスターとして利用してつからだよ」

話に割り込んできたのは、空から降つてきた悪魔だ。

「えと、確か名前は……ヨシリカだつたか?」

「『名答ツ、よく憶えてたじやねえか、お前さん記憶力がいいみて  
一だな』

力カカ、と笑い、地に足をつく。風の音が止んだおかげで、彼ともまともに話ができるそうだ。

「俺の名前はレツカス！ レツカス＝ヨシルカだ！ 何の因果か知らねえが、こうして俺とお前さんは出会ったんだからな、気軽にレツカスと呼んでくれや」

悪魔 レツカス＝ヨシルカは、オレの手を強引に掴み取り、ぶん回しながら握手する。

「囚人が テスターつて……それ、本当か？」

話の規模が大きくなり、頭が混乱してきた。しかも今、俺らって言わなかつたか。

「タスピール、キミはEGOの最終クエストをご存知かな」「最終クエストつて……あの、報奨金が一億ドル貰える奴のことか？」

質問を質問で返し、ローランドの顔を見上げる。

「その通りだ」

肯定し、ローランドは頷いた。

本来、MMORPGには明確な終焉は用意されていないのだが、EGOにはゲームクリアしたプレイヤーに報奨金が支払われることになつてゐる。その額、実に一億ドル。一生遊んで暮らせると金額だ。勇者軍の陣地に作られた？門？をくぐる勇敢な者を、EGOでは総称して勇者と言い表す。

そして、勇者と呼ばれる者たちがEGOに作られた全ての門を制覇すると、ゲームクリアの褒章として？王者の証？と呼ばれるものゲーム・マスターをGMから授与ゲートされる。これを手に入れた者が、EGOを完全制覇した唯一のプレイヤーとして、現実世界にて報奨金を手にするシナリオだ。

あまりにも高額な報奨金に目が眩んだプレイヤーは少なくなく、たつた一人で数十種類のアカウントを使いこなす猛者も中には存在

するらしい。

「それがどうかしたのか？」

「？王者の証？を手にすることはできるのは、なにも勇者だけではないということさ」

そう言つて、ローランドは周囲のモンスターを示すように手を向けた。

「王者の？者？は勇者の者、そして王者の？王？は魔王の王……、つまりEGOを完全制覇することができる可能なプレイヤーは、勇者軍だけではないということだ」

勇者軍だけでなく、魔王軍にも、ゲームクリアの条件があるらしい。

しかしながら何故、彼らは魔王軍のプレイヤーとして行動しているのか。そもそもどうやって魔王軍のプレイヤーになつたのか。

頭を捻り、ロアとレッカスの言葉を思い出す。

「……そういえば、囚人がどうとか言ってたよな？　あれはどうことなんだ」

少し離れた場所で話を聞いていたロアが、再度オレの許へ歩み寄つてきた。

「わたしと、ヨシルカとベイクルーア、そして此処にいる全てのプレイヤーは、現実世界では囚人として服役中の身なの」

「……は？」

今度こそ、目が点になった。

思いもかけない告白に、オレは口を開けたまま、ロアと視線を合わせる。

「これは勇者軍のプレイヤー誰一人として知ることのない、わたしたち囚人にしか話されていない極秘事項なのだけど、EGOの開発メンバーでありGM<sup>ゲーム・マスター</sup>を務める狂気的な開発者たちは、EGOで人を殺すことができるか否か試すために、テストの実験台として囚人を利用しているわ。……そして、その実験台にされた囚人が、わたしたちよ」

「それはつまり、現実世界にも影響が出るってこと……なのか？」

恐る恐る真偽を確かめてみると、ロアはしつかりと頷いた。

此処に来てからというもの驚かされたことばかりだが、さすがに度肝を抜かれた。

「勇者軍のプレイヤーは、インターネット上で発売されたデータタップログラムを購入し、IDCを手に入れることで、EGOにログインすることが可能となる。但し、それは私たちのような囚人ではなく、あくまで一般人を対象としている。つまりキミも、本来ならば勇者軍の陣地に転移するはずだつた」

再び、ローランドが話し始める。

オレの姿を瞳に映し込み、憐れむような表情を浮かべている。

「現在、魔王軍で活動する全てのプレイヤーは、服役中の囚人たちだ。そして今、キミも魔王軍の陣地にいるということは、恐らくは何らかのバグによつて魔王軍のプレイヤーとして処理されることになつたのだろう。初期設定ができなかつたのもそれが原因とみて間違いない」

できることなら信じたくなかったが、現に今、オレは此処にいる。勇者軍の陣地ではなく、魔王軍の陣地に転移し、魔王軍のプレイヤーと言葉を交わしている。たとえ目の前の現実を否定したくとも、彼らが存在すること自体が事実であることを証明していた。

「どうやらキミは私たちと同じ立場ではないようだ。服役中の囚人というわけではなさそだからね。……だが、たとえキミが囚人ではないとはいえ、魔王軍のプレイヤーとして此処に存在していることは事実だ。よつて、EGOの真実を知る権利があるだろう」

それから暫く、オレは彼らの話に耳を傾けることになつた。

EGOの開発チームは、テストにおいて、まずは囚人を実験台へと指名した。

EGOでは、IDCによつて初期設定を終え、電波信号を受け取り半睡眠状態になつたプレイヤーに対し、脳細胞を破壊し尽くす凶悪なウイルスプログラムを送り込んでいる。ゲーム内で死亡した後、

現実世界でも死に至るか否か、それを確かめるために、プレイヤーをワザと死亡させ、七日後に一度目の死を体験させるらしい。

脳細胞に送り込まれたウイルスが活動を開始するには七日間のタイムラグが存在し、それは テストが終了し、EGOが稼働し始めた後、一般人が三回以上死亡した瞬間に現実世界でも死に至らないように偽装し、死因を解明し辛くするのが目的だった。

だが、EGOの本当の恐ろしさは別に存在する。

それは？終焉のカウントダウンシステム？だ。

たとえゲーム内で死に至らなくとも、一度でもウイルスを脳細胞に送り込まれたプレイヤーは、七日間以上ログアウトをし続けていた場合、ウイルスが強制的に活動を始める。

つまりは、EGOの裏の顔を知ったとしても、決して途中で止めることはできないことになる。三度の死を体験するか、王者の証を手に入れるか。二者択一なのだ。それもこれも全ては、脳細胞にデータベースプログラムをエクスポートする技術が開発されたことが原因と言える。

だが、最も重要なのは、魔王軍と勇者軍の全てのプレイヤーが助かる方法だ。

勇者軍のプレイヤーがウイルスを死滅させ、EGOから解放されるには、全ての門をくぐり抜け、王者の証を手に入れなければならない。

そして魔王軍のプレイヤーが解放されるには 、

「EGOにリアルタイムでログイン中の、勇者軍の全てのプレイヤーを殺すことだ」

「そんなの無理に決まってるだろ！ EGOは世界中で稼働してるんだぞ？ 一人残らず殺すなんて不可能だっ」

むちやくぢやな条件だった。これではまるで死ねと言つていうようなものだ。

「不可能でも、やらねばならないのだ……。それにまだ、救いはある。圧倒的に理不尽な条件とはいえ、私たち囚人は勇者軍のプレイ

ヤーを一人殺すたびに、刑期が一日短縮されるのだ」

「……そ、そのため……GMに従つて、罪もない人を殺すのか……？」

魔王軍のプレイヤーは服役中の囚人のため、どんなに酷い扱いを受けても文句を言つことができず、GMの指示に従い続けるしかない。それは納得せざるを得ないだろう。だがしかし、ゲーム内で勇者軍のプレイヤーを殺し、現実世界でも死に至らしめることに対し、迷いや躊躇はないのか。

「否定はしない。直接手を下すわけではないが、事実として人を殺すことには変わりはないのだからな。GMにとつて私たち囚人は、都合のいい テスターということだ」

魔王軍の全てのプレイヤーは、たった一度の死により、現実世界でも死に至るように設定されているので、仮想世界とは言えども死に物狂いで生きていかなければならない。

一般人とは異なり、ゲーム内で死ねば現実世界でも死に至ることを知らされている彼らは、死から逃れるために必死でゲーム内を生き、勇者軍のプレイヤーを狩り続けている。

当然、中には拒否する者や積極的にプレイしない者、更には歯向かう者もいるが、現実世界での拷問を受けることにより、例外なくGMに屈する形となり、従うことで生きながらえているというわけだ。

元々、一つのIDでは「回しか死亡」することができるのは公式サイトでも公表済みだが、現実世界に影響があることは伏せられているので、今もなお現実世界ではEGOのIDCを手に入れ、脳細胞にウイルスを送り込まれる一般人が増え続けている。それはつまり、魔王軍のプレイヤーがウイルスから解放される可能性は日に日に少なくなっているということだ。

仮想世界での現実を目当たりにして、オレは目の前が真っ暗になりそうだった。そんなオレの思考を気にした様子もなく、レッカスがカラカラと笑いだす。

「だがよー、ルイピスタは俺たちとは違つて囚人じゃねえんだろ？  
んじゃあ今すぐEGOからログアウトして、すぐに警察に訴えて  
くれば問題解決だぜ、これで俺たちも死の恐怖から解放されるつ  
てわけだ」

そう言われてみれば確かに、オレは一般人の中で唯一、EGOの  
真実を知っている。

それに加え、今ならまだGMゲーム・マスターにも気づかれていないかもしない。  
ログアウトを実行に移すなら、今だ。

「そ、そうだな！ オレがログアウトすれば、あんたらは勿論、勇  
者軍のプレイヤーも皆まとめて助かるんだよな？」

レッカスの言葉に希望を抱き、頬を緩める。

そうと決まれば、いつまでもこんなところにはいられない。ウイ  
ンドウ画面を出してログアウトのコマンドを選択するんだ。

右手の人差し指で左手の甲に触れ、知覚を感じ取るようにスライ  
ドしてみる。これがEGOに於けるウインドウ画面の入出の仕方だ。  
ここで一つ、また新たな疑問が浮かび上がる。

EGOでは、知覚は認識されないはずだ。それなのに何故、オレ  
は指先の感覚から肌に触れる感触まで、しつかりと感じ取つている  
のだろうか。

「……どうかしたの？」

手の動きを止めたオレを不審に思つたのか、ロアが声を掛ける。

「いや、……なんでもない」

今はそんなことを気にしている場合ではない。

EGOの真実を伝えるために、ログアウトを実行に移さなければ  
ならないんだ。

「じゃあ、短い間だつたけど……また、何処かで」

ありがとう、と言つのはおかしい気がした。現実世界に戻り、EGOの真実を世に公表したとしても、此処にいる奴らは囚人だ。死に至ることがなくなつたとしても、もう一度出会つことができるか  
は分からぬ。

だから、誰の目も見ずにウインドウ画面へと視線を向け、ログアウトを実行に移した。

「……ん、……あれ？」

が、何も起こらない。

否、正確には異常な事態が発生していた。

「どうした、ログアウトの仕方が分からねえのか？」

いつまで経つてもログアウトしないオレを見かねたのか、レッカスが横に並び、ウインドウ画面を覗き見る。

「えーっと……ログアウト、不可能？……なんだこりゃ」

ログアウトを実行に移すと、ウインドウ画面にエラーが表示され、同時にログアウト不可能とのメッセージが浮かび上がる。

「ログアウト不可能つて……どうこりつて？」

レッカスに続いて、ロアがウインドウ画面に目を通す。次いで、ローランドも同じく。

「ちよ、ちよと待つてくれよ、ログアウトできないことなままり……」のままだとオレ、永遠にEGOの中にいなけりやならな  
いつてことなのか？

「残念だが、そういうことになるだろつな」

溜息を吐き、ローランドは顔を俯けた。

「……そんなバカな……な、なんでこんなこと……」

何度も実行に移しても、ログアウト不可能のメッセージが浮かび上  
がってくる。

このままだと、オレは現実世界に戻ることができない。もしそうなってしまえば、オレは勇者軍のプレイヤーだけでなく、此処にいる魔王軍のプレイヤーにも勝る最悪の状況に陥ってしまったことになる。

「この状況から察するに、キミは既にGMに気づかれている可能性が高いと言えるだろ？」「つまり、オレがログアウトできないのはGMの仕業つてことか……」

「つまり、オレがログアウトできないのはGMの仕業つてことか……」

ウイルスには感染しているものの、オレ以外の全ての人間は現実世界に戻ることができる。

だが、オレはEGOを完全制覇しなければ戻ることすら不可能だ。  
いや、たとえ完全制覇したとしても、ログアウト可能になるか否かはGMにしか分からない。言つなれば、今のオレは籠の中の鳥と同じだ。

「……ルーア、あなた現実世界では一人暮らしなの？」

ロアが、オレの名を初めて口にする。

ほんの少し驚いたが、すぐに言葉を返す。

「母さんと二人暮らしだ。……でも、それがどうした？」

現実世界におけるオレの状況を把握し、ロアは安堵の表情を浮かべた。

「それなら、あなたのお母さんが現実世界であなたの体に触れさえすれば、EGOのシステム上、強制的にログアウトするから問題ないわ」

「その手があつたか！」

なるほど、確かにそれならログアウト不可能な状態に陥つたとしても、強制的にログアウトすることができるかもしれない。母さんが仕事から帰つてくるのは夕方頃だから、一時間も経てばオレの異変に気づいてくれるはずだ。

「そう上手くはいかないだろ？」

しかし、水を差す人物が一人いた。それはローランドだ。  
「相手は人の命を弄ぶことに何の躊躇いも持たないGMたちだ。強制ログアウトすらも不可能となつていても不思議ではないな」

城内が、しんと静まり返る。

「……ま、まさかそこまでは……」

しない、とは言い切れない。人を死に至らしめるシステムを生み出した奴らが、抜け道を残すほど間抜けではないはずだ。

ローランドの言葉に愕然とし、オレはその場に立ち尽くす。陽気な喋り方のレッカスが話しかけるのを躊躇するほど、今のオレは落

ち込んでいた。

けれどもEGOは、絶望に浸る時間すらも『えてはくれないらしい。

「ぐつ、なんだ、この音はつ」

突如、何処からともなく振り時計の音が鳴り始めた。天井から否、空から聞こえてくる。

周囲がざわつき、囚人たちの喋り声が室内に響きだす。ローランドを含め、ロアとレッカスも何が起こっているのか分からぬようだ。

窓のそばに近づき、暗闇に埋もれる空を見上げてみる。とここで、左手の甲が淡い点滅を二度繰り返す。これはEGOの中でメッセージを受信した時の合図だ。此処にいる奴らには例外なく、メッセージが届けられているようだ。

隣に並んで窓の外を眺めていたロアは、すぐにメッセージを確認し、オレにも見えるように甲の位置を変える。そして、オレは目を疑つた。

【件名】生まれたての魔王を殺せ

【本文】全てのEGOプレイヤーにお知らせ致します。

つい先ほど、魔王軍の陣地にて、魔王が誕生致しました。

魔王の名は、ルイピスタ＝タスピール。生まれたての魔王

です。

これに伴い、EGOでは、本日二十一時より魔王討伐クエストの開催を決定致します。

魔王討伐クエストへの立候補者の中から、最もステータス値の高いプレイヤーに挑戦

権が与えられ、魔王ルイピスタを相手取り、一対一の真剣勝負を挑むことができます。

魔王ルイピスタの討伐に成功した者には、クエストクリアの報奨金として、現実世界

において、EGO開発本部より現金一億ドルが贈呈されます。魔王ルイピスターを討伐

する者が現れるまで、毎週日曜日の二十二時にて開催を予定しておりますので、魔王

討伐クエストへの参加を「希望の方は、こちらまでメッセー<sup>ジ</sup>をお願い致します。

生まれたての魔王 ルイピスター＝タスピール。それは勿論、オレの名だ。

これは一体何の冗談だ。

「生まれたての魔王……ルイピスター＝タスピール……！？」

メッセージに目と通し、ロアがオレの名を呟く。現状を把握しているのはGM以外に存在しないだろう。何がどうなっているのか頼むから教えてくれ。

「……ルーア、あなたのメッセージを見せて」

「オレの？ どうしてだよ」

聞き返すと、ロアは自身に届けられたメッセージに視線を向ける。「このメッセージは、魔王が生まれたことを知らせるために送られていたものだから、もし仮にあなたが本当に魔王なら、あなたに届いたメッセージには何か別のことが書かれているかもしれないわ」なるほど、確かにロアの言うとおりだ。

魔王に対して、魔王討伐クエストへの参加を促すわけがないからな。

言われるがまま、オレは左手の甲を指でスライドし、メッセージを確認する。そして、

「……は、はは……っ、だからログアウトできないのか、オレは……」

空笑いが、現実を直視する。今この瞬間に我が身へと降りかかる不幸を受け入れたくはなくとも、たった一つのメッセージによって、無理矢理に納得させられてしまつ。

【件名】魔王のIDを持つ者へ

【本文】 ルイピスター＝タス庇ール様、おめでとうございます。

あなたがご使用になられたIDは、魔王軍の魔王としてEGOをプレイ可能なIDと

なっております。他のプレイヤーとは異なる点が幾つかござりますので、初めに、簡単

單なる説明をさせて頂きます。

魔王のIDを持つ者は、勇者軍のプレイヤーとしてEGOをプレイすることができます。

せん。EGOへのログインが行われると同時に、魔王軍の陣地にある魔王の城の一室、王の間へと強制転移されます。

公式には発表されておりませんが、魔王軍のモンスターの中にはプレイヤーの方も存

在し、あなたを含めた全ての魔王軍のプレイヤーは、EGOにおいて一度の死を体験

することにより、アカウントが消滅されるようにプログラムされています。

また、例外として、魔王のIDを持つ者がEGOの中で死に至った場合、その瞬間、全ての魔王軍のプレイヤーが死に至ります。

あなたの配下となる魔王軍のプレイヤーと共に、王者の証を手に入れるか、または真のクエストクリア条件を達成しない限り、あなたはEGOからログアウトすることができます。

できませんので、予めご了承下さい。

では、生まれたての魔王ルイピスター＝タス庇ール様。死に至る最後の日まで、EGOをお楽しみください。

あまりにも理不尽で一方的な宣告に、つい、足の力が抜けてしまった。

そんなオレに肩を貸し、ロアが体を支えてくれる。みつともなくて涙が出そうだ。

「何が書いてあつたの？」

ロアに見えるように、手の甲を傾ける。

そして、ロアもまた同じように、GMから届けられたメッセージゲーム・マスターを読み、愕然とした。

「……オレが死ねば、此処にいる全てのプレイヤーが……死ぬんだとよ」

生まれたての魔王、ルイピスター＝タスピール。

生まれて初めてEGOにログインした、MMORPG初心者だ。だが、そんな頼りがないのないオレの肩に、囚人たちの命が掛かっている。信じたくはないが、これが現実だ。あらがうことができない。

「お……おい、どうしたってんだよ？ 何かヤバいことでもあつたのか？」

見る見るうちに青ざめしていくオレとロアの表情によって、辺りが不安に包まれていく。

「ルーア、此処にいる皆にメッセージを転送して」  
レッカスの声を聞き、ロアは息を吐く。心を落ちつけようとしているのだろう。

ロアは自分の手をオレの右手に重ね、コマンドの入力先を指示示していく。それにより、どうやらオレに届けられたGMからのメッセージは、全ての魔王軍のプレイヤーに転送されたらしい。オレとロア、そしてレッカスを中心として、周囲がざわめき始める。

「ルイピスターが……俺たちの魔王だつて……？」

信じられないものでも見るかのように、レッカスが視線をぶつけてくる。

それは憐みか、それとも絶望か。恐らくは、後者の方が色合いが

強いに違いない。オレが死ねばレッカスも死んでしまうのだからな。  
EGOをプレイしたことのない初心者に、自分の命を握られている  
と考えてみれば、誰もが絶望するはずだ。

「なるほど……、魔王討伐クエストの真の狙いが分かつた」

そこに、ローランドの声が耳に届く。

転送されたメッシュージに目を通したのだろう。

「キミが死ねば、私たちも死ぬ。そしてそれは、魔王討伐クエスト  
においても例外ではない」

「……あ」

魔王討伐クエストの真の狙い、それは、

「EGOが稼働を開始してから一年が経過し、未だ死に至らず、も  
がき続ける囚人を」

一人残らず皆殺しにすることだ。

その言葉が木霊し、此処にいる全ての囚人が絶望に声を上げること  
ができなくなつた。

「……ロア」

そんな中、真っ暗に染まり始める視界の向こうで、オレはまた別  
のことを考えていた。

隣に寄り添い、微かに肩を震わすロアの息遣い、そしてその生温  
かな息の吹きかかる感触に、確かにオレは知覚を感じ取つていた。

エンデレス・ゲート・オンライン。この世界には、知覚が存  
在する。

それはつまり

：

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7539x/>

---

エンドレス・ゲート・オンライン

2011年10月20日19時05分発行